

VIEWPOINT 音楽

伊藤祐二（作曲家）

ユー・ジ 芥に 気をつける

（今回は肩の力を抜いて）

DISTAT TERRA FESTIVAL 2022

DISTAT TERRA は、遠方の地、辺境の地、というような意味だろうか。

昨年12月、妻、井上郷子（ピアニスト）と共に、自らそう呼称する DISTAT TERRA フェスティバルに参加。東京から一日以上かけてブエノスアイレスへ。さらに2時間のフライトでネウケン、さらに荒涼とした景色の中を車で3時間、Choel Choel（チョエレ・チョエル）着。そこは、リオネグロ川の悠々たる流れ、裕福な人の住む小奇麗な区域以外は、おおむね乾燥して風が強くほこりっぽく、何もない土地が広がる。ここで、古楽、現代音楽、ダンス、フェスタレーション、映画、講習 ec. のフェスティバルが開催されている。井上郷子は、その第一回に呼ばれ、フェルドマンの「トライア・ディックメモリーズ」を弾き、激賞され、「あなたはここに住みなさい、家を一軒あげるから」と言われ、それ以来の縁。

（私は内輪巻めを書いているのではなく、アルゼ

ンチーナの氣質を書いているのです。）今回は近藤譲作品集と、故マリアノ・エトキン、私の新作、リンダ・カトリン・スミス、フェルドマンの「パレ・ド・マリ」を含むプログラム、の二つのリサイタル、私のレクチャー。

昼に、小さな図書館のホールスペースで室内楽とダンス、暑くて朦朧。夕刻、元ワイン醸造所、広く、大きな機械、強い色の照明のもとでギターアンサンブル（含・エレキ）、パーカッション、コントラバス。夜、実験農場（屋外）、赤と青の照明、フルート二本（シャリノ作品、満天の星、遠くから聞こえる鳥の声、動物の声。夜、遠出して溪谷へ、ガイドの懐中電灯に皆付き従い、溪谷の底へと歩く。所々で演奏、インスタレーション、崖に巨大な映像投影、ここでも満天の星。参加者が泊まる小奇麗でこじんまりしたホテル（フェスに協力）ロビーでピアノ、アンサンブルのコンサート。郷子のリサイタル、挨拶したところで停電。皆、素早く非常灯をはずし、それをガムテープで譜面台に。ピアノは古いスタインウェイで、状態はひどく悪い。しかし、郷子がソステナートペダルを必要としたので、大変な思いをして探してくれたもの。フェスティバ

ル期間中、サッカーワールドカップの準決勝、決勝。試合中、フェスティバルは中断、皆集まって応援。アルゼンチンが優勝、一同狂喜乱舞、ロビーでのコンサート中、ガラスの外は国旗をたなびかせ走るバイク、車のお祝いクラクション。

ヨーロッパのフェスティバル、講習等に時におめにかかる政治的なあれこれ、権力的体質はここでは見られない。オーガナイズしている、ホセ・マヌエル・セラノは、あえてあまり自作品をステージに乗せない。人柄がよく、皆に愛されている。参加者は、新鮮な心で関わり楽しんでる。利いた風な口をきく人も見当たらない。

終了後、ブエノスアイレスでの、故マリアノ・エトキンのパートナー、セシリア（作曲家。郷子とは旧知）との二日間。

周知のごとく、歴史的、政治的、経済的にアルゼンチンは厳しい。しかし、（だからこそ）人々は特有の生きる知恵と力を持っているようだ。そして音楽に集う。（期間中、いったい、何十回ハグし、されたのだろうか。）

東京にもどり、ほぼ100%の人がマスクをし、自分に閉じ籠っているように見え、ハグの習慣を輸入してもいいのでは、と思う。